現職日本語教師のアカデミック・スキル養成のためのカリキュラムデザイン

―日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）における実践から―

篠崎摂子・長坂水晶・木山登茂子

〔キーワード〕非母語話者日本語教師、日本語表現科目、専門教育、論文執筆、口頭発表

〔要旨〕

本稿では、非母語話者現職日本語教師向けの１年間の修士課程におけるアカデミック・スキル養成について報告する。本プログラムでは日本語表現科目の担当講師と学生の専門分野が一致している利点を生かし、専門科目との連携も考慮したカリキュラムデザインを行った。具体的には、「特定課題研究」の論文執筆と研究発表会での口頭発表を目標に、日本語表現科目と２つの専門科目の授業をデザインした。

特徴は、①日本語表現科目では専門分野の論文講読を通して、研究に必要な読解力や文章表現力、そして論理的・批判的思考力を養成すること、②専門科目では専門分野の知識を蓄積し、研究方法などのスキルを身に付けること、③研究会発表や調査実習などの準備を両方の科目で行うことである。その結果、本プログラムの研究活動で必要とされるアカデミック・スキルに焦点をしぼった指導が実現できた。

１．はじめに

「日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）」（以下、本プログラム）は、2001年に国際交流基金日本語国際センターと政策研究大学院大学、国立国語研究所の３機関連携で立ち上げられた、海外の現職日本語教師向けの１年間の修士課程である。本プログラムは、各国・各地域の日本語教育において基盤的、指導的役割を担う人材の養成を目的としている[(1)]が、その一環として修士学位取得にふさわしい研究能力（アカデミック・スキル）の養成が求められている。

現職教師が日本語教育学の研究活動を行うために必要なアカデミック・スキルとは何か、特に本プログラムのように、研究経験が少ない非母語話者教師が日本語で研究活動を行う際に必要なアカデミック・スキルをどのように養成するかについては、これまであまり報告されていない[(2)]。本稿では、本プログラムにおけるアカデミック・スキル養成のためのカリキュラムデザインについて、2006年度と2007年度の実践を報告する。なお、本研究は、国際交流基金日本語国際センター調査研究部会2007年度調査研究プロジェクトとして実施したものである。

2．カリキュラムデザインの背景

舘岡（2002）では、大学での勉学に対応するために必要なスキルを「アカデミック・スキル」と呼び、具体的には、資料収集力、分析力、思考力、批判力、発表力、論文記述力などの技能能力を指す、としている。そして、「留学生の場合はそのスキル遂行のための日本語力を補わなければならない」（舘岡2002：２）が、留学生対象のコースでは一般的に日本語表現科目がその役割を果たしている。

長坂・木山（2005）では、日本語表現科目で養成すべきアカデミック・スキルとして①論理的・批判的思考、②日本語運用力、③アカデミック・リテラシーの３つを挙げた。そして、「専門が同一の留学生に対する言語表現科目」では、この３つの能力を養成するためにも「専門分野の知識」を蓄積することが有効であり、授業で学生の専門分野の内容に関する論文を扱うことを提案した。また、専門科目との内容面での連携や、指導講師との連携の必要性も指摘している。

本プログラムにおけるこれまでの実践からも、日本語表現や発表の形式などに焦点を当てた一般的なアカデミック・スキル養成の手法では効果が実感できず、プログラムの目標をより明確にし、日本語教育学という専門教育との連携を深めた、アカデミック・スキル養成のためのカリキュラムデザインの必要性を、筆者らは体験的に共有してきた。特に本プログラムでは、日本語表現科目の担当者が一部の専門科目を担当し、研究指導も行っているため、このような連携が行いやすいという利点がある。そこで、2006年度と2007年度は、日本語表現科目を中心に、専門科目との連携を考慮したカリキュラムデザインを行うことにした。

3．カリキュラムデザインの方針

3.1　プログラムの概要

本プログラムの2007年度の全体カリキュラムは表１の通りである。修了要件として合計33単位以上の科目単位取得と、修士論文に代わる「特定課題研究」を課している。また、同じ３機関連携の日本言語文化研究プログラム（博士課程）と合同で運営する研究会組織として「日本言語文化研究会」があり、年２回の公開研究発表会での口頭発表を義務づけている。

アカデミック・スキル養成のためのカリキュラムデザインを行うにあたり、本プログラムにおける研究活動として「特定課題研究」（論文執筆）と「日本言語文化研究会」（口頭発表）に関わる一連の活動を円滑に行えるようになることを目標とした。そして、現行のカリキュラムですぐに対応可能な科目ということで、筆者らが担当する「日本語表現法演習」、「日本語教育概論」（前半部分）、「言語教育研究法」の３科目を対象とすることにした[(3)]。この３科目は主に秋学期に設定されており、プログラムでの研究活動の入口となる基礎的内容を扱う科目でもある。

表１　日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）2007年度カリキュラム

学期	月	主な行事 （＊「特定課題研究」関連）	授業科目（太字は必修科目、□は今回のカリキュラムデザイン対象科目） 言語領域	言語教育領域	社会･文化･地域領域	特定課題研究
秋	10 11 12 1	10月上旬　入学 10月中旬　＊テーマ発表会 11月上旬　＊指導講師決定 12月上旬　研究発表会１	□日本語表現法演習 日本語学Ⅰ	教師教育論 □日本語教育概論 日本語教授法Ⅰ 第二言語習得研究 □言語教育研究法	現代日本の教育と文化 日本事情教育研究	特定課題研究演習Ⅰ
冬	2 3	３月中旬　＊中間レポート	日本語学Ⅱ 対照言語学	教師教育論 □言語教育研究法 日本語教授法Ⅱ	日本事情教育研究	
春	4 5 6 7	４月上旬　＊帰国実習 ５月上旬　＊実習報告会	言語学概論 社会言語学 認知言語学	教師教育論	現代日本の社会システム 日本事情教育研究 異文化コミュニケーション 言語教育政策研究	特定課題研究演習Ⅱ
夏	8 9	８月下旬　＊口頭試問 ９月上旬　研究発表会２ ９月中旬　修了		教師教育論		特定課題研究演習Ⅲ または特定課題研究論文

※「日本語教授法Ⅰ」は４単位、「特定課題研究演習Ⅰ」は３単位、他はすべて２単位（１回90分×15回）。
※※「教師教育論」は通年、「言語教育研究法」は秋・冬学期、「日本事情教育研究」は秋・冬・春学期開講科目。

3.2　プログラム参加者

2007年度のプログラムには、６カ国８名（韓国１、中国２、タイ１、ベトナム２、ドイツ１、カザフスタン１名）の現職日本語教師が参加した。性別は男性２名、女性６名、年齢は20代２名、30代６名、所属機関は高等教育６名、中等教育１名、その他の機関１名、日本語教授歴は５年未満４名、５～10年２名、10年以上２名である。

本プログラムの参加者には、日本語能力試験１級程度以上の日本語運用力（日本語の文献が読める、日本語で議論ができる、研究レポートが書ける程度）が求められており、書類審査後に筆記と面接による試験を実施している。また、プログラム開始時に実施するACTFL-OPI（口頭能力テスト）では、ほとんどの参加者が上級以上のレベルと判定されている。同時に実施するパソコン・スキルに関する調査では、Webサイトの閲覧、電子メールの送受信、Wordでの日本語文書作成は基本的に支障がないが、ExcelとPowerPointの操作にはあまり慣れていないものが多い。なお、本プログラムでは参加者の研究活動支援のために、全員にノートパソコンを１台ずつ貸与し、週２回各３時間のチュータリングを設定している。

参加者の研究面での全体的な特徴は、現職教師としての現場の経験や、限られた文献からの断片的、一般的な知識はあっても、日本語教育学に関する体系的な専門知識を持っているものは少ない。また、学士号またはそれに相当する資格を有することが参加資格となっているが、日本語によるアカデミック・スキルの訓練を受けたことがあるものは少なく、日本語での論文

やレポート執筆、研究会での口頭発表の経験もほとんどない。そのため、来日時に本プログラムでの研究活動に不安を感じているものが多い[(4)]。

カリキュラムデザインを行うにあたっては、以上のような参加者の状況を考慮した。

3.3　特定課題研究

前述の通り、本プログラムは１年間の修士課程であるため、修士論文に代えて「特定課題研究」を課している。「特定課題研究」は、現職日本語教師である参加者（以下、学生）が各自の教育現場の課題を解決するための個人研究を行うもので、プログラム申請時に研究テーマと研究計画を提出し、入学後は学生１名につき２名の担当講師による個人指導のもとで研究を進める。各学期にそのための授業科目が設定されており[(5)]、春学期（４月）にはデータ収集のため原則として４週間程度の帰国実習を行う。各学期の科目概要は表２の通りである。なお、一般的には「研究報告」を執筆するが、学生自身が希望し、審査に合格した場合は「研究論文」を執筆することができる。分量は「研究報告」がA4紙20枚（教材作成の場合は教材サンプルと報告10枚）以内、「論文」は30枚以内で、審査基準も異なっている。

表２　「特定課題研究」科目概要

期	科目名	内　　容
秋 冬	特定課題研究演習Ⅰ	将来、各国で日本語教育における指導者となるために、現場の事情を踏まえた各自の研究テーマを設定し、その課題解決のための全体構想の作成、先行文献の読解などの基礎作業を行う。
春	特定課題研究演習Ⅱ	原則として、自国の現場に戻り、研究テーマに添った実習（調査研究を含む）を行う。また、その準備や発表のための整理を行う。
夏	特定課題研究演習Ⅲ	先に自ら設定した課題に沿って、理論と実践を結びつけた研究報告を作成する。
	特定課題研究論文	先に自ら設定したテーマについて、特定課題論文を執筆する。（この科目は、審査で論文作成の実力があると判断された者のみ履修することができる）

「特定課題研究」に関わる一連の活動としては、表２の内容の他、表１の「主な行事」に示した「テーマ発表会」、「指導講師決定（面談）」、「中間レポート（帰国実習計画）」、「帰国実習報告会（中間発表会）」、「口頭試問」などがあり、それらの場面に対応するためのアカデミック・スキル（口頭発表、レポート作成などを行う力）が必要とされる。

3.4　日本言語文化研究会

「日本言語文化研究会」の２回の研究発表会の内容は、表３の通りである。

この発表会は外部に公開されているもので、学生は自分の発表をするだけではなく、研究発

表３　「日本言語文化研究会」研究発表会の内容

回	時期	テーマ	内　　容
1	12月上旬	「自国の日本語教育を語る」	自国の日本語教育の現状と課題について報告する。
2	９月上旬	「特定課題研究発表会」	各自の「特定課題研究」の成果を報告する。

表会の企画・運営にも一部参加する。また、研究会では毎年『日本言語文化研究会論集』（以下、『論集』）を刊行しており、「特定課題研究」の成果物は、口頭試問による審査後、若干の修正を行ったうえで全文がそのまま掲載される。そのため、学生は『論集』の執筆要領にしたがって「研究報告」または「研究論文」の原稿を作成することが求められる。このような一連の研究会活動への参加を通して、そこで必要とされるアカデミック・スキル（本格的な口頭研究発表、執筆要領にしたがった原稿執筆などを行う力）を養成し、また研究会運営のノウハウを身に付けることが期待されている。

3.5　対象科目

カリキュラムデザインの対象とした３科目の2007年度の概要は、表４の通りである。

表４　カリキュラムデザイン対象３科目の概要（2007年度）

期	科目名	内　　容
秋	日本語表現法演習	論文読解、研究発表、レポートや論文の執筆など日本語教育についての研究活動に必要な実践的な日本語運用力を養うことを目的とする。また、本プログラムの研究テーマ発表会、日本言語文化研究会を研究活動の実践の機会と捉え、その準備を行う。
秋	日本語教育概論（前半）	日本語教育を「ヨコ（地域・世界的広がり）」と「タテ（時代的変遷）」から概観し、自国での自分の果たしうる役割について検討することを目的とする。前半では、地域・世界的広がりの中で自国の日本語教育を観る目を養う。（後半、略）
秋冬	言語教育研究法	言語教育研究で使用される主な研究方法を知り、各自の研究課題に即した調査法を身に付けることを目的とする。具体的にはテスト、アンケート、インタビュー、教室分析を取り上げ、データ収集・処理を演習形式で行う。冬学期末には、各自の帰国実習の計画と調査方法の検討を行う。

「日本語表現法演習」は長坂・木山（2005）で検討した日本語表現科目であり、アカデミック・スキル養成の中心となる授業である。「日本語教育概論」（前半）は、専門分野の知識を蓄積する専門科目で、12月の研究発表会で自国の日本語教育事情を報告するための内容面の準備を行うとともに、「特定課題研究」での問題意識と自分の教育現場の現状分析の視点を養うことを目的としている。そして、「言語教育研究法」では、「特定課題研究」のための研究方法と研究計画を取り上げ、日本語教育学という専門分野に即したアカデミック・スキルの養成をめ

表５　３科目で扱うアカデミック・スキルの内容

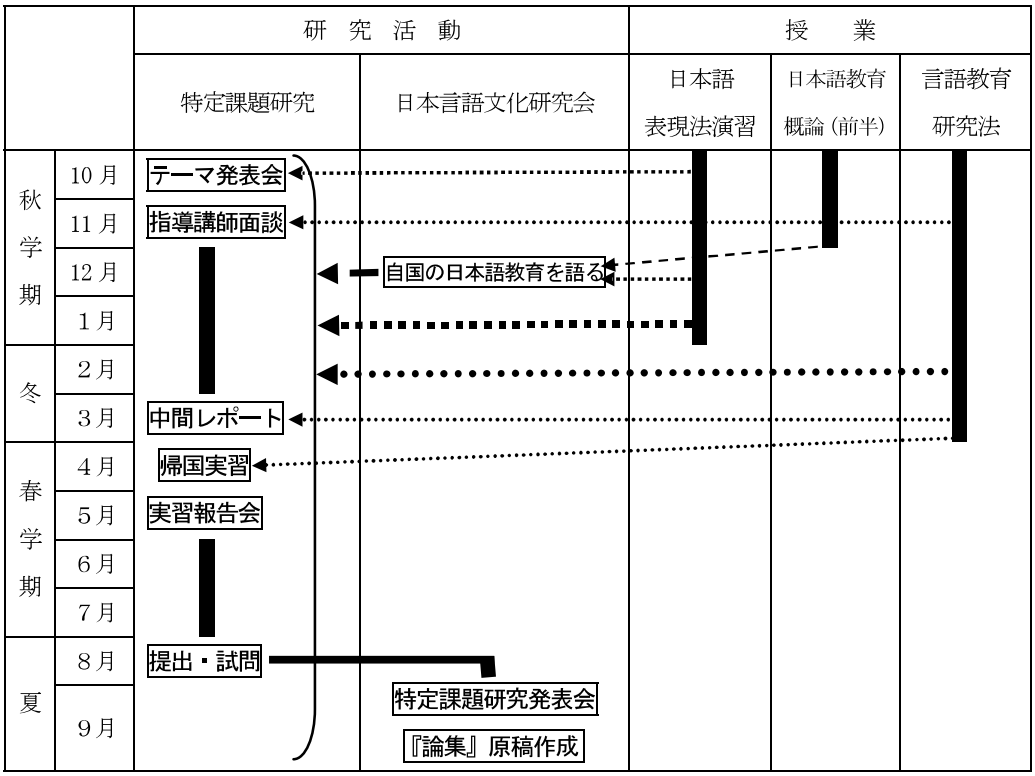
アカデミック・スキルの内容		日本語表現法演習	日本語教育概論(前半)	言語教育研究法
1日本語教育学の研究	①日本語教育研究について全体的な流れを理解する。	○		○
	②自分の研究テーマについての問題意識を明らかにする。	○	○	
	③自分の教育現場の現状と問題点を分析する。	○	○	
	④研究テーマに関する先行研究を探す。	◎	○	○
	⑤先行研究を読む。	◎	○	
	⑥研究課題（リサーチ・クエスチョン）を決める。	○	○	○
	⑦研究方法を決める。	○		○
	⑧研究計画を立てる。	○		○
	⑨データ収集の準備をする。	○		○
	⑩データを収集する。	○		○
	⑪データを入力・集計する。	○		○
	⑫データを分析する。	○		○
	⑬データから考える（考察する）。	○		○
	⑭結論を出す。	○	○	○
	⑮今後の課題を考える。	○	○	○
2論文執筆	①構成を考える。	◎		
	②先行研究をまとめる。	◎		
	③研究方法や手順を説明する。	◎		○
	④データを説明する。	◎		○
	⑤分析・考察を書く。	◎		○
	⑥決められた書式に従って書く。	◎		
	⑦図表を入れる。	○		○
	⑧注をつける。	○		
	⑨参考文献を書く。	◎	○	
	⑩要旨をまとめる。	◎		
3口頭発表	①構成を考える。	◎	○	
	②配布資料（レジュメ）を作る。	◎	○	
	③PowerPointで発表用スライドを作る。	◎	○	
	④配布資料やスライドを使いながら発表する。	◎	○	
	⑤質問の意図を認識して的確に答える。	◎	○	

ざす。

表５は、本プログラムでのこれまでの経験をもとに各科目で扱うアカデミック・スキルの内容を一覧にしたものである。「日本語表現法演習」では、専門分野の論文講読により全てのアカデミック・スキルを網羅すると考えたが、この科目で特に重点的に扱ったものには◎を付した。なお、「論理的・批判的思考」（長坂・木山2005）については研究全体に関わるものと考え、この一覧には含めなかった。

最後に、カリキュラムデザインの全体イメージを図１に示す。

図１　カリキュラムデザインの全体イメージ



※太い実線はその科目と活動が行われている期間を示す。

※※点線の種類は科目を表す。細い点線は個別の行事の準備を直接的に行うもの、太い点線は研究全体に関わるものである。

4．カリキュラムデザインの実際

以下、2007年度の「日本語表現法演習」、「日本語教育概論」（前半）、「言語教育研究法」の具体的な授業内容について述べる。

4.1　日本語表現法演習

この授業は、⑴テーマ発表会準備、⑵論文講読、⑶研究発表会準備、⑷先行研究レビューの４つの内容で構成されている。2007年度は２名の担当講師が分担または共同で授業を担当した。

⑴　テーマ発表会準備（１・２回）

本プログラムでは、授業開始２週目に「特定課題研究テーマ発表会」を実施して、学生が自分の研究テーマと研究計画を３機関のプログラム関係者に紹介し、それをもとに指導講師を決定している。この授業の最初の２回はその準備にあてられ、学生が日本語による研究発表の基本を理解し、自分の研究内容について他人にわかりやすく伝えられるようになることを目的としている。

初回は、レジュメの役割と書式の確認、発表の内容と形式のチェック項目の確認、題目の適切性・妥当性などを取り上げ、次回までに発表内容とレジュメを準備させた。２回目は、グループで発表練習と質疑応答を行い、学生同士でお互いの発表についてコメントし、その経験をもとに本番の発表会に臨んだ。また、テーマ発表会での自分の発表を録音し、当日の質問、コメントの内容を聞き取って主旨を書いてくることを課した。これは、プログラム開始直後で質問やコメントを聞き取り、その主旨を理解することがまだ難しい場合が多いためである。

⑵　論文講読（３～８回、12・13回）

この授業の中心的な部分で、学生の専門分野である日本語教育学の論文の講読を通して、研究に必要な読解力や文章表現力、そして論理的・批判的思考力を養成する。また、専門分野の論文を読むことで、専門分野の知識の蓄積を行い、研究方法への理解を深めることも意図している。

この授業で論文講読を中心に据えた背景には、筆者らのこれまでの実践経験から、表現形式に焦点をあてた授業に効果が感じられなかったことがある。そして、担当講師と学生の専門分野が一致している利点を生かし、深い内容理解（批判的読み）に重点を置いて多くの論文を読むように導くことと、批判的に読むことを通して論文を執筆する力を養うことをめざした。なお、授業では表現形式に焦点を当てない代わりに、それに関する教材[6]を配布し、適宜参照させた。

授業で論文講読を行うにあたっては、次のような工夫を行った。

・最初に論文の要旨を読む活動を行い、要旨から内容を想像し、批判的に論文を読むための準備をした。
・内容的に読みやすい論文を選び、調査報告、実践報告、研究論文などの論文の種類や、量的研究、質的研究などの研究方法の多様性にも配慮した。
・学生が一人で論文を読み進められるような「ガイダンス」を作成・配布して事前に準備させ、授業ではさらに読みが深まるようなディスカッションを行った。ガイダンスに沿って

学生が読み取った内容は事前に提出させ、授業後コメントをつけて返却した。

・批判的読みに関する自己チェックシートを作成・配布して、学生に自分の読みの状態をモニターさせた。

ここで言う「ガイダンス」とは、内容理解と妥当性の検討が必要と考えられる点を質問項目にしたもので、具体的には、論文の前提、方法、データから導かれる結論、論の展開などの理解を導くものと、それらの妥当性を問うものがある。

論文講読の各回のテーマと内容は表6の通りである。

表6　論文講読の内容

回	テーマ	内　　容
3	1 要旨を読む	複数の日本語教育の論文の題目と要旨のみを配布し、①要旨に書かれていることを正確に読み取る。②要旨に書かれていないことで疑問点を述べ合う。
4	2 調査報告を読む	論文とガイダンスを配布し、①ガイダンスに沿って読み取る。②疑問を持ちながら読む。
5	3 実践報告を読む	①ガイダンスに沿って読み取る。②筆者の研究手法、考察内容を批判・検討する。
6	4 研究論文を読む	①論文から得た、ヒントについて述べる。②ガイダンスに沿って読む。 ③自己チェックシートに記入し、批判的に読み取る力について振り返る。
7	5 批判的読み(1)	①ガイダンスに沿って読む。②論文の問題点を指摘する。
	6 データから考える	「言語教育研究法」の課題（後述）についてフィードバックを行う。
8	7 量的研究を読む	論文を読んで、研究課題と結論、研究方法、研究の評価をまとめる。
12	8 質的研究を読む	論文を読んで、研究課題と結論、研究方法、データの分析・結果・考察の内容、研究の評価をまとめる。
13	9 批判的読み(2) ((1)と同じ論文)	①講師からのコメントを参考に論文を読む。②査読者として、論文に対する意見、コメントをまとめる。③授業で指定された発表者が意見を発表し、それに対して質疑応答、議論を行う。④活動を振り返り気づいたことを記す。

(3)　研究発表会準備（8～11回）

12月の研究発表会の企画および運営方法の決定と、各自の発表準備をこの授業で行っている。目的は、テーマ発表会準備に続けてさらに本格的な研究発表の方法を身に付けることと、将来の日本語教育指導者として研究会運営のノウハウを学ぶことである。

まず、8回目の授業の一部を使って、講師が研究会の趣旨を説明し、各自の発表内容をもとに全体会と分科会の構成およびテーマと、当日の役割分担を決定した。発表内容は、後述の「日本語教育概論」の授業で先に検討していたものだが、分科会のテーマに沿って調整した学生もいた。

発表会が行われる週には準備のため授業を2回設定した。9回目の授業では、事前に準備し

たレジュメと発表用スライドをもとにグループで発表内容を検討して、お互いにコメントをした。その結果をもとに発表内容を修正し、10回目の授業で分科会ごとに発表リハーサルを行った。また、研究会実施後の11回目の授業では各自の発表と研究会の運営についてグループで「ふりかえり」を行った。

⑷　先行研究レビュー（14・15回）

最後の２回の授業では、この授業のまとめとして、各自の研究テーマに即した先行研究レビューを行い、「特定課題研究」につなげている。

内容は、自分の研究テーマに関する先行研究論文を５本以上読み、論文講読で使用したガイダンスを参考に５本の論文の概要（研究課題と結論、研究方法、データの分析・結果・考察、自分の評価）をまとめ、それらを自分の研究の先行研究として位置づけるというもので、学生には授業の１カ月前に指示を出した。ここでは、先行研究を探すこと、論文の内容を正確に読み取ること、また批判的に読むこと、自分の研究との関係を考えること、以上を日本語でまとめることが求められる。授業ではレジュメを準備して１人10分で発表し、それについてディスカッションを行って、最後にレポートにまとめて提出させた。

4.2　日本語教育概論（前半）

この授業では、最初に担当講師が世界の日本語教育の動向を紹介し、その後は学生が自国の日本語教育について１人２回ずつ（概要と各論）発表する。授業を通して、12月の研究発表会「自国の日本語教育を語る」での発表内容を準備し、「特定課題研究」の問題意識と現状分析の視点を養うことが目的である。また、学生の専門分野に関する口頭発表指導の機会ともなっている。2007年度は２人の講師が共同で担当した。

初回の授業では、コミュニケーションを重視した日本語能力の考え方、世界の日本語教育の現状（国際交流基金の調査など）、各国のシラバス・ガイドライン、日本国内の日本語教育の状況（生活者のための日本語など）を取り上げ、世界的な日本語教育の広がりへの理解を深めた。

２・３回目の授業では、学生が自国の日本語教育の全体状況（概要）をまとめて１人10分で報告し、質疑応答を行った。その際、国際交流基金の「日本語教育国別情報」ホームページなどを参考にして、自分の教育現場の周辺だけではなく、広く自国の状況を概観し、紹介できるようになること、また、他の学生の発表から他国の日本語教育の状況を知ることで、自国の特徴を再認識することが意図されている。

４～７回目の授業では、１回目の発表を掘り下げて、自国の日本語教育について、その特徴と考えられるテーマ、あるいは自分の教育現場に関連がある事柄についてさらに詳しく調べ、１人20分で報告し、質疑応答を行った。ここでは、どのようなリソースが利用できるかを知ることも重視した。この２回目の発表の内容が12月の研究発表会につながっていく。

２回の発表のあとで、内容をレポートにまとめて提出させたが、その際に自国の日本語教育に関する文献リストを作成して一緒に提出させた。また、１回目の発表ではレジュメのみ、２回目の発表ではレジュメと発表用スライドを準備させ、授業でそれらについてコメントを行い、発表資料の作成についても段階的に指導を行った。

4.3　言語教育研究法

この授業では、学生が日本語教育研究の流れを理解し、「特定課題研究」を行ううえで必要な研究手法を身に付けることを目的としている。2007年度は４人の担当講師が、テスト（データ入力)、アンケート、インタビュー、授業分析を分担して取り上げ、最後に帰国実習の計画の検討と、そこで実施するデータ収集の模擬実習を行った。

初回は研究に関するオリエンテーションということで、研究の進め方に関する文献[7]を参考に研究の流れと一般的な研究の種類や方法を確認したあとで、文献検索法の紹介と実習を行った。

２回目からは具体的な研究方法の紹介と実習になるが、本プログラムの学生が「特定課題研究」でよく利用する手法として、テスト（データ入力)、アンケート、インタビュー、授業分析を取り上げている。以下、テスト（データ入力）の授業について述べる。

ここではテストそのものよりも、Excelを利用したデータ入力や管理、計算、グラフ作成などを主に扱った。前述のように多くの学生はExcelの操作にあまり慣れておらず、基本操作から始めて、基本的な統計分析（平均、標準偏差、ヒストグラム、ｔ検定、相関など)、グラフの作成まで一通り実習した。最後に、既成のテスト問題を利用してデータを収集し、その結果を集計して分析・考察したレポートの作成を課した。この課題のフィードバックは「日本語表現法演習」の授業で行ったが、一連の論文講読の中で、自分が書いたものを見直す機会とした。

アンケート、インタビュー、授業分析も同様に実習を交えて具体的な手法を紹介していくが、それと並行して「特定課題研究」の指導も行われており、学生は自分の研究に必要な手法をこの授業で身に付けることが期待されている。そして、冬学期後半には、この授業の中で帰国実習の研究計画を発表し、さらに、帰国実習で実施するデータ収集の材料を使用してクラスで模擬実習を行った。これは主に個人指導で行われている「特定課題研究」の進捗状況を学生および講師間で共有し、お互いにコメントする機会にもなっている。

5．成果と課題

2007年度の秋学期終了時とプログラム終了時に、参加者８名に対して、３科目の授業内容とアカデミック・スキルに関する記名式アンケート調査を行った。以下、その結果を参照しながら、今回のカリキュラムデザインの成果と課題について述べる。

5.1　各授業の内容

2008年１月の秋学期終了時に、３科目の授業で扱った25項目について、①授業としてどうだったか（授業に対する評価）、②自分はその内容を身に付けたか（習熟度）、を４段階評定法で調査した（資料１）。その結果、①の全項目の平均[8]が3.65、②が同2.45で、学生は授業で扱った項目は全体としては役に立ったが、自分はまだ十分に身に付けていないと感じていることがわかった。ただし、②については全体的に高い点をつけているもの（個人平均3.16）と、低いもの（同2.16）に分かれ、学生による個人差が大きい。また、中には授業の評価よりも自身の習熟度を高くつけているものもいた。

①で全体的に学生の評価が高かったもの（全体平均3.88）は、テーマ発表会および研究発表会の口頭発表の準備や、研究法での研究の流れ、文献検索、アンケート、インタビューなどである。アカデミック・スキルに関するもので評価が相対的に低かったものには、研究法のテスト（3.25）、論文講読の量的研究（3.50）、先行研究レビュー（3.50）がある[9]。

②で学生の評価が比較的高かったものは、論文講読の要旨（3.13）、研究会の企画・運営（2.75）、研究法の文献検索（2.75）である。評価が低かったものには、研究法のテスト（2.00）、インタビュー（2.25）、研究の流れ（2.38）、論文講読の質的研究（2.13）、調査報告、批判的読み、量的研究（以上2.38）、先行研究レビュー（2.38）がある。

以上の結果から、学生は口頭発表の準備は授業で十分に行えたが、専門分野の研究手法については、授業としては役に立ったとしても自分が十分に身に付けるにはいたっていない、と感じていることがわかった。特に、テストで扱ったデータ処理や統計分析、量的・質的研究、先行研究レビューなど、「特定課題研究」にもつながる内容の評価が、①②ともに低いので、授業での扱い方に改善が必要である。

5.2　アカデミック・スキル

2008年９月のプログラム終了時に、表５のアカデミック・スキルのうちの24項目[10]について、「特定課題研究」への取り組みを通して①自分はそのスキルを身に付けたか、②そのスキルを身に付けるにあたって３科目の授業は役に立ったか、を４段階評定法で調査した（資料２）。

その結果①の全項目の平均が3.03、②が3.26で、学生は全体的に「特定課題研究」への取り組みを通してアカデミック・スキルをほぼ身に付け、秋学期の３科目の授業も役に立ったと感じていることがわかった。ただし、①については全体的に高いもの（個人平均3.62）と、低いもの（同1.98）に分かれ、学生による個人差が大きい。なお、①が低いものは、②も低い傾向がある。

①で評価が低いものは、口頭発表の質疑応答（全体平均2.38）、研究の結論を出すこと（2.63）、データ分析（2.75）、論文執筆の分析・考察を書く（2.75）、要旨を書く（2.75）である。一方、

評価が特に高いものは、研究の問題意識（3.50）である。

②で評価が低いものは、論文執筆の要旨を書く（2.75）、参考文献を書く（3.25）、口頭発表の質疑応答（2.88）、研究の研究方法、データ入力・集計、考察、結論（以上3.00）である。一方、評価が特に高いものは研究のデータ収集準備（3.63）である。

以上の結果から、学生はプログラム終了時にはアカデミック・スキルをある程度身に付けており、秋学期の授業がそれに一定の役割を果たしたと感じていることがわかった。特に、研究の問題意識を明らかにすることに対する①の評価が高いことは、指導者養成という本プログラムの主旨に適っている。また、研究のデータ収集準備に対する②の評価が高いのは、冬学期の「言語教育研究法」の授業で、データ収集の模擬実習を行ったことが評価されたと考えられる。その一方で研究方法やデータ処理に関する評価が①②ともに低めなことから、学生がその辺りに研究の難しさを感じていることがうかがえる。口頭発表の質疑応答が①②ともに特に低いのは、調査の時期が「特定課題研究」の口頭試問の直後で、その能力の不足を学生が実感していたためであろう。

5.3　カリキュラムデザイン

今回のカリキュラムデザインでは、「特定課題研究」の論文執筆と研究発表会での口頭発表を目標に、日本語表現科目と２つの専門科目の連携でアカデミック・スキル養成のための授業を実施した。その成果として以下の３点を挙げたい。

① 本プログラムの研究活動で学生が必要とするアカデミック・スキルを明らかにし、それに焦点をしぼった指導が実現できた。

② 日本語表現科目と専門科目との連携の可能性を考え、実現することができた。

③ 「特定課題研究」および研究発表会準備のための個別指導の負担を授業によって軽減できた。

③について補足すると、研究発表会の準備は2005年度までは主に授業外で行われており、秋学期は特に授業時間が多いため、学生も担当講師もその負担が非常に大きかった。今回それを授業内に取り込み、授業でのアカデミック・スキル養成の一環として位置づけたことは効果的だったと言える。また、「特定課題研究」については、これまで学生１名に対して講師２名という体制で密な個人指導を行ってきたが、今後は学生同士の学び合いという観点からもゼミ指導の導入が検討されており、アカデミック・スキル養成に関わる部分についてもさらに授業を効果的に実施することが求められる。

次に今後の課題として、以下の３点が挙げられる。

① 前述の２回の調査で学生が「授業が不十分」「自分は十分に身に付けていない」と認識している内容の扱い方を見直す。

② 本プログラムの全科目に対する調査でこの３科目を混同している学生がいたので、学生が科目間の連携を十分認識して取り組めるような工夫を行う。

例）プログラム開始時にカリキュラムデザインを説明する。

③ 文章表現指導の充実を望む学生への対応を考える。

例）学生が書いた設問への解答や論文のレビューに対するフィードバックを丁寧に行う、ピアで書く活動を取り入れる、論文講読の中で表現形式を意識化させる、など。

本プログラムでは秋学期に日本語教育学の研究を行うための基礎を作る必要がある。アカデミックスキルを、最初にどのように授業で導入し、コース全体の中でどのように養成していくかという視点で、日本語表現科目と専門科目との連携を今後も検討していきたい。

〔注〕

(1)本プログラムの概要と日本語教育指導者養成の方針については木谷・簗島（2005）を、2006年度コースと教授法科目のカリキュラムデザインについては阿部・坪山（2008）を参照されたい。

(2)篠崎・浜田（2005）および篠崎・曹（2008）では、中国の北京日本学研究センター在職修士課程における非母語話者現職日本語教師の研究活動について報告している。

(3)2006年度と2007年度は、篠崎がプログラム担当者としてこの３科目を他の講師と共同で担当した。「日本語表現法演習」は、長坂が2001年度から2007年度まで、木山が2002年度から2005年度まで、篠崎が2006年度と2007年度担当した。

(4)参加者の中には、日本の大学での留学経験があるものや、他の専門分野で修士号を取得しているものもいるが、日本語教育学の研究活動には不安を持っているものが多い。

(5)「特定課題研究」科目は、2005年度までは冬学期からの設定だったが、研究初期の指導をより丁寧に行うため、2006年度に秋学期後半からに変更された。

(6)アカデミック・ジャパニーズ研究会（2002）『大学・大学院留学生の日本語４　論文作成編』アルク

(7)レメニイ，ダン著、小樽商科大学ビジネス創造センター訳（2002）『社会科学系大学院生のための研究の進め方　修士・博士論文を書くまえに』同文舘出版

(8)以下「全項目の平均」は全項目に対する全員（８人）の平均値、「個人平均」は全項目に対する個人（１人）の平均値、「全体平均」はある項目に対する全員の平均値を示す。

(9)他に「日本語教育概論」の海外と日本国内の日本語教育の状況に関する内容等も全体的な評価が低かったが、ここではアカデミック・スキル養成に直接関係するものだけを取り上げる。

(10)表５の「３口頭発表①構成を考える」についてはこの調査では聞かなかった。

〔参考文献〕

阿部洋子・坪山由美子（2008）「現職日本語教師に対する教授法授業のカリキュラム・デザイン」『国際交流基金日本語教育紀要』４号、131-142

木谷直之・簗島史恵（2005）「日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）の取り組み」『日本言語文化研究会論集』創刊号、1-16

篠崎摂子・曹大峰（2008）中国の現職日本語教師向け修士コース―北京日本学研究センター在職日本語教師

修士課程実施報告―」『国際交流基金日本語教育紀要』４号、177-184
篠崎摂子・浜田麻里（2005）「非母語話者教師の日本語教育研究における研究課題の設定過程について―北京日本学研究センター在職日本語教師修士コースの場合―」『国際交流基金日本語教育紀要』１号、69-83
舘岡洋子（2002）「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律的学習」『東海大学紀要．留学生教育センター』22号、東海大学留学生教育センター、1-20
長坂水晶・木山登茂子（2005）「１年間の修士コースにおける留学生のための日本語表現科目―論理的・批判的思考トレーニングを目指した事例研究―」『日本言語文化研究会論集』創刊号、75-87

〈資料１〉授業内容に関するアンケートとその結果（秋学期終了時）

（質問）これから「特定課題研究」に本格的に取り組むに際し、秋学期の授業について振り返ってみてください。

①授業としてどうだったか。（１全然役に立たなかった　←→　４とても役に立った）

②自分はその内容を身に付けたか。（１全然できない　←→　４十分にできる

			①授業としてどうだったか					②自分は身に付けたか				
			1	2	3	4	平均	1	2	3	4	平均
日本語表現法演習	テーマ発表会準備	①発表内容の検討、リハーサル	0	0	1	7	3.88	0	1	7	0	2.63
		②レジュメの作り方	0	1	0	7	3.75	0	3	4	1	2.50
	論　文　講　読	①要旨を読む	0	0	1	7	3.88	0	0	4	4	3.13
		②調査報告を読む	0	0	3	4	3.57	0	2	6	0	2.38
		③実践報告を読む	0	0	3	5	3.63	0	1	7	0	2.50
		④研究論文を読む	0	1	1	6	3.63	0	0	7	1	2.75
		⑤批判的読み	0	0	2	6	3.75	0	5	1	2	2.38
		⑥テストデータから考える	0	1	2	5	3.50	0	3	4	1	2.50
		⑦量的研究を読む	0	1	2	5	3.50	0	3	4	1	2.38
		⑧質的研究を読む	0	0	3	5	3.63	0	5	3	0	2.13
		⑨先行研究レビュー	0	1	2	5	3.50	0	3	5	0	2.38
	研究発表会準備	①発表会の形式と運営	0	0	1	7	3.88	0	2	3	3	2.75
		②発表準備（レジュメ・PPT作成）	0	0	1	7	3.88	0	2	5	1	2.63
		③発表リハーサル	0	0	1	7	3.88	0	1	7	0	2.50
		④振り返り	0	0	4	4	3.50	0	1	6	1	2.63
日本語教育概論	(1)	①日本語能力とは？	0	0	3	5	3.63	0	1	5	1	2.57
		②各国のシラバス、ガイドライン	0	2	3	3	3.13	1	3	2	1	2.00
		③日本国内の日本語教育	0	2	4	1	2.86	1	4	2	0	1.86
	(2)研究発表会発表内容の検討		0	0	3	4	3.57	0	2	3	2	2.57
言語教育研究法	(1)研究とは？（研究の流れ）		0	0	1	7	3.88	1	2	4	1	2.38
	(2)文献検索		0	0	1	7	3.88	0	1	5	2	2.75
	(3)研究の手法		0	0	1	7	3.88	0	3	4	0	2.29
	①テスト　⇒エクセルによるデータ処理		0	0	2	5	3.25	0	6	2	0	2.00
	②アンケート		0	0	1	7	3.88	0	3	4	1	2.50
	③インタビュー		0	0	1	7	3.88	0	4	4	0	2.25

※「１～４」欄は選んだ人数、「平均」欄は平均値。

〈資料２〉アカデミック・スキルに関するアンケートとその結果（プログラム終了時）

（質問）「特定課題研究」に取り組んでみて、現在の自分のアカデミック・スキルについて振り返ってください。

①自分はそのスキルを身に付けたか。（１全然身に付けていない　←→　４十分身に付けた）

②「日本語表現法演習」「日本語教育概論」「言語教育研究法」の授業は、そのスキルをみにつけるうえで役に立ったか。（１全然役に立たなかった　←→　４とても役に立った）

		①自分は身に付けたか					②授業は役に立ったか				
		1	2	3	4	平均	1	2	3	4	平均
1日本語教育の研究をすること	①日本語教育の研究について全体的な流れを理解する。	0	0	7	1	3.13	0	0	4	4	3.50
	②自分の研究テーマについての問題意識を明らかにする。	0	1	2	5	3.50	0	0	4	4	3.50
	③自分の教育現場の現状と問題点を分析する。	0	0	5	3	3.38	0	0	4	4	3.50
	④研究テーマに関する先行研究を探す。	0	1	4	3	3.25	0	1	5	2	3.13
	⑤先行研究を読む。	0	1	4	3	3.25	0	0	4	4	3.50
	⑥研究課題（リサーチ・クエスチョン）を決める。	1	1	2	3	3.00	0	1	4	2	3.14
	⑦研究方法を決める。	0	2	4	2	3.00	0	0	4	3	3.00
	⑧研究計画を立てる。	0	1	5	1	3.00	0	1	4	2	3.14
	⑨データ収集（アンケート、インタビュー、テスト、実験授業など）の準備をする。	0	1	7	0	2.88	0	0	3	5	3.63
	⑩データを収集する。	0	1	3	4	3.38	0	0	4	4	3.50
	⑪データを入力・集計する。	0	2	4	2	3.00	0	1	6	1	3.00
	⑫データを分析する。	0	2	6	0	2.75	0	1	4	3	3.25
	⑬データから考える（考察する）。	0	2	5	1	3.29	0	2	3	2	3.00
	⑭結論を出す。	0	3	5	0	2.63	1	0	5	2	3.00
	⑮今後の課題を考える。	1	0	6	1	2.88	1	0	4	3	3.13
2（日本語で）レポートを書くこと	①構成を考える。	0	1	6	1	3.00	0	0	4	3	3.43
	②先行研究をまとめる。	0	0	7	1	3.13	0	0	3	4	3.57
	③研究方法や手順を説明する。	0	1	5	2	3.13	0	0	4	4	3.50
	④データを説明する。	0	1	6	1	3.00	0	0	4	4	3.50
	⑤分析・考察を書く。	0	3	4	1	2.75	0	1	4	3	3.25
	⑥決められた書式に従って書く。	1	0	6	1	2.88	1	0	3	4	3.25
	⑦図表を入れる。	1	0	3	4	3.25	0	2	2	4	3.25
	⑧注をつける。	2	1	1	4	2.88	1	2	1	4	3.00
	⑨参考文献を書く。	1	1	3	3	3.00	1	0	3	4	3.25
	⑩要旨をまとめる。	1	1	5	1	2.75	1	2	3	2	2.75
3日本語での発表	①配布資料（レジュメ）を作る。	0	1	5	2	3.13	0	1	4	3	3.25
	②パワーポイントでスライドを作る。	1	0	3	4	3.25	0	1	3	4	3.38
	③配布資料やスライドを使いながら話す。	0	1	5	2	3.13	0	0	5	3	3.38
	④質問の意図を認識して的確に答える。	2	3	1	2	2.38	1	1	4	2	2.88

※「１～４」欄は選んだ人数、「平均」欄は平均値。